

神戸百店会 だより



★元町バルパローレ

華やかにオープン

元町三丁目風月堂の向い
(元マサヤ)に異人館風の
ファッションビルバルパ
ローレが11月2日オープン。
3階まではファッションブ



挨拶する近藤社長

ティック、宝石店、レスト
ランなどのテナントが、4
階以上はマサヤの事務所に
なっている。中央に吹き抜
けのある明るいビルだ。

オープンに先立つ11月1
日、オリエンタルホテルで
関係者約1000人が集ま
って記念のパーティが開か
れた。「神戸らしいビルに、
元町に合った店が集まって
オープンできて嬉しい」と

マサヤ社長近藤常吉さんの
挨拶。今陽子の歌とショー
も加わってバルパローレ
のオープンを祝った。

なお神戸の店の中で、パ
ルパローレに出店したのは
マサヤがブティック6店、
オックスフォードスポーツ
観音屋珈琲店、ハナワグリ
ル、青峰、壁の穴などの有
名店である。

★北野クラブ

クリスマスショー

(チャーチ・一八〇〇円)
21日 湯井・一葉・フランメンコ
22日 夢アクトバットとフランメンコ
23日 夢アクトバットとマジック
(ダンテ)・アンド・メリー
24日 マジックと武井義明ショー
25日 トリオ・アル・ヒネス
お問合せ番 二二二二二五 北野ク
ラブまで。

★79 XMAS PARTY

IN KOBE

オリエンタル79クリスマス
パーティ、12月22日(土)
の夜にジェリー・藤尾・藤尾
友子夫妻&マリリンを迎え
て楽しく華やかに……。
演奏/北野タダオとアロー
ジャズオーケストラ



ジェリー・藤尾夫妻

●ランドパーティー PM 5:30より
お一人様一万円(フルコースディ
ナー・ショータイム・抽選会・税サ
ービス込)

●ダンスパーティー PM 9:30より
お一人様五千円(ショー・ダンス
タイム・お楽しみスナック・お飲み
もの・税サービス込)

★サノヘキャピタルショー

80春夏を先取り

ひとあし早く80年春夏の
コレクションをお届け。恒



デザーブルの春コート

例サノへのキャピタルショ
ーが、10月にヌーベルサノ
へで開かれた。デザーブル、
マルク・ボーガン、アザロ
ヴィル、アンジエロ・タル
ラッチなどサノへのファン
にはもうお馴染みのブラン
ド。クラシックな流行の舞
い戻りのせいか、オーソド
ックスながら変わらぬ趣味
の良さのデザーブル、春夏
らしい軽快なアザロヴィル
に人気。冬を前に、来年の
装いをもう気にかける人
には楽しいショーだった。

●ショップトビックス

MERRY CHRISTMAS

★六甲山の静かな雰囲気の中でふ
たりで祝うクリスマス。六甲オリ
エンタルホテルでは12月15日(土)
12月25日(火)クリスマスディナー
をご用意。メインはターキーまた
はステーキでフルコース二万円
(税サ込み)ご予約ください。窓
ぎわの良いお席をおとします。

★港が見えるニッポートホテル
回転レストラン鳴門でクリスマス
ディナーを。六千円、八千五百円、
一万二千円の3コース。12月22日
12月25日 3114171

★ブランドクラブのクリスマス
は23日から25日まで。お食事は立
食(税・サ込)で一万三千円。抽
選会、エレクトーンの演奏をお楽
しみ下さい。32111455

★忘年会・新年会はビヤ・ホル
ニョ・トリーキーで美味しく賑
やかに。鉄板焼コース二千八百円
鍋物コース三千円、オールドガル
コース二千八百円(3コースとも生
ビール飲み放題)。ジンギスカン
食べ放題、生ビール飲み放題で二
千円。39114511

★フッパッシュンパーククリスマス
セール 世界のXマスプレゼン
ト 11月23日12月25日の期間
中、お買上げ三千円ごとに一回抽
選。世界中からXマスにちなんだ
素敵な贈りものを集めてプレゼン
ト。曜日、人形、絵本、お菓子
など。毎日異なる恒例のXマスコ
ンサートを開きます。12月26日1
31日のバイバイバザールでは一年
間のご愛顧に感謝、各お店心を込
めてのサービスセール。

★元町通の風月堂ホールはもうす
っかり神戸っ子のなじみにもな
りました。12月の催しは10日(土)
また寄席「恋雅亭」(出演/桂春団
治他)、17日・イベント・ジローコ
ンサート、24日「銀河鉄道99
9」上映会があります。

39112412

ボケツトジャーナル



★昭和54年度兵庫県文化・科学・社会賞受賞者決定

本年度の兵庫県文化・科学・社会各賞の表彰式が11月1日午後、兵庫県民会館で行われ、坂井県知事から表彰状と副賞が贈られた。本年度の受賞者は次の11氏1団体である。



県民会館での贈呈式

△文化賞▽岡沢廣郎（西脇市文化連盟会長67歳） 萬福大悦（日本畫家77歳） 出口草露（書家64歳） 西村雲華（華道家63歳） 米花稔（神戸大学名誉教授66歳） 山本大慈（日本画家71歳） △科学賞▽岩井誠二（神戸大学医学部教授54歳） 津田五郎（神戶機械研究所研究員53歳） 豊田実（神戸大学工学部教授62歳） 中島正基（姫路工大教授56歳） △社会賞▽福智盛（兵庫県いなみ野学園長68歳） 神戸市消防音楽隊（平島敏正隊長）

★神戸フィルハーモニック

1月8日にデビュー

音楽愛好家にとって待望久しかった神戸のオーケストラがいよいよデビュー。



朝比奈 千足さん

朝比奈千足さんを常任指揮者とする神戸フィルハーモニックだ。

来年1月8日（火）午後7時から神戸文化大ホールで行われる。曲目はモーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲、グリーグ／ピアノ協奏曲、イ短調、ベートヴェン／交響曲第8番「長調」の3曲で、宮沢明子が独奏を弾く。15000円。

□問い合わせ／神戸市交響楽協会電話（078）35113335

★恒例のワイド・ワイド

今年も文化ホールで12月の神戸の行事として定着してきた「WIDE

WIDE JAZZ”、今年は15日（土）16日（日）の両日、神戸文化ホールで開かれる。

今年で第7回を迎えるこのジャズフェスティバルは神戸市という地方自治体が主催する全国でも珍しいコンサートで、毎年地元の名演奏者が参加しているが、今回はサントノール北野店のピアノリスト、安藤義則さんが率いるグループで、安藤さんは「僕の音の世界を聞いてもらいたい」と張切っている。日本のジャズメンにも詳しい行田よしお氏の司会も聞きたい。



ピアノの山下洋輔さん

15日（土）4時 ネイティブサン、鈴木勲&ニューファミリー・スイング・オール・スターズ、阿川泰子、山下洋輔3、渡辺貞夫5 16日（日）2時 外山喜雄&デキシランドセインツ、渡辺香津美G、山本剛3、中本マリ、安藤義則G、スーパースクイズ・インコウベ、渡辺貞夫5 司会は両日とも行田よしお A席／三八〇〇円 B席／三〇〇〇円 C席／二五〇〇円

★54年文化庁芸術祭参加に

神戸勢の女流頑張る 花柳芳一師の芸は、まことに牡丹花のように艶やか

誕生日
ありがとう
運動



桂米朝さんご一家のご協力

誰にでも年に一度めぐってくる誕生日に、自分がこの世に生かされている意義を考えると共に、知恵おくれの問題についても、自分のこととして考えていきましよう。この運動の呼びかけに共鳴して、ご協力いただく方の手紙や献金、古切手は、毎日、本運動に届きます。

先日は、落語家の桂米朝さんご一家から、ご協力いただきました桂さんご一家のご協力は、昭和五十二年から、毎年続いております。今年は、ご家族おひとりおひとりの献金と共に、先般八十八歳のご高齢で天寿を全うされたおばあさんのご供養として、金一封も同封されてました。

三年前に、この運動のことを知っていただいた桂さんご一家にはいろいろのご協力いただきありがとうございます。

毎年の献金の外に、ご子息は、自分の通学している高校で、この運動の古切手集めのピラを配って級友に協力を呼びかけてくださいました。また、奥さんは、毎日新聞の投書欄へ投稿してくださり、この運動への参加を呼びかけてくださいました。

こうした桂米朝さんご一家のご協力に、ボランティア一同、心から感謝いたします。

誕生日ありがとう運動本部

651神戸市葺合区御幸通八十一一六 神戸国際会館一階の郵便局の隣 電話二五一八一六一一内線三二六

で品良く大らかだ。昭和54年度の芸術祭参加番組として、10月23日国立小劇場において三度目の「芳一の会」を開き、清元「北州」歌沢「紀伊の国」義太夫「関寺小町」を舞った。



花柳芳一師

また、10月30日に国立演芸場で松本尚女師が地唄「山姥」「隔」の二曲で参加、五回目の挑戦。中堅の尾上菊見師も10月27日に尾上菊見リサイタルとして清元「お夏」長唄「石橋」の二曲で参加、引き続いて尾上菊見舞踊会を開き、東京の稽古場も今年から持つなど地についた東京進出。

11月1日にはモダンダンスの今岡頌子さんが、「翹」「お七」「雪の杜若」で加藤きよ子さんと共に意気を吐いた。

★若柳吉童、吉金吾の襲名を祝う会開く

「えっさほっさ」の掛声に初代若柳吉童師と二代目吉金吾さんが、ホエ駕に乗って会場へ登場するとチョンと木が鳴って「おめでとうございます」と拍手が響く。



会合だった祝う会

開かれた司会は平松アナウンス。舞の一字を朱金で鮮やかに描き贈った望月美佐さん。松井神戸文化ホール館長の発起人あいさつ。若柳宗家のスピーチ。友人の新井満、上原まり、森哲也、松井幸三、マカンブッサル、バーボンクラ



注目を集めた東京での記者会見

プの唄と陽気な会だった。★全国タウン誌11社による「旅行アサヒ」創刊発表 全国のタウン誌11社が結集して出版する、旅の文化誌「旅行アサヒ」はいよいよ

11月2日、3日、4日と神戸でも初めての三日間にわたる襲名披露にハリキル二人を祝い励ます集いが、2日夜舞踊公演の初日を終わってから生田神社会館で

よ出版体制が固まり、去る10月18日(木)午後一時から関係マスコミ記者百十名を迎えて創刊の発表を行った。北は北海道、南は沖縄まで日本列島を11タウン誌で結ぶ「旅行アサヒ」は画期的な試みであり、話題と注目をあつめている。編集の基本方針として、①旅本来の魅力である「旅のこころ」を再発見する②地方の時代を創造する③旅の原点にたち戻り、国際的な文化交流の場を創造するといふ三本の柱がたてられており、「中央から地方へ」の発想を打ち破り、東京もひとつのロカルだという発想の転換こそ、80年代の文化創造の哲学だとしている。

★「久坂葉子研究」発刊

「久坂葉子研究」創刊号が11月1日に発行された。27年前の大晦日に自殺した神戸の作家久坂葉子(享年21歳)への熱い思いを込めた論考や久坂の作品などが掲載されている。

B5判 180頁 700円
△取扱店 後藤書店あかつき書房・渚久堂(以上、三宮センター街)・イカロス書房(高架下)・コーベックス(さんちかタウン)・海文堂(元町3)・木村書店(灘・明石) 連絡先 神戸市東区文庫内橋通6丁目1-19 302山下方 電話241-6580(昼) 321-0819(夜)

美術ガイド



★県立近代美術館

前田寛治展 11/17～12/16

★西宮大谷記念美術館

エジプト・コプト織の展覧 11/23～12/16

★KCCアートギャラリー

暮しを楽しむ小品展 12/1～12/25

★KCCギャラリー

具象びげプロ写真展 12/1～12/6

★海星女子学院写真展

御影工業高校写真展 12/14～12/20

★キタノ・サカス

黒瀬朝展 12/2～12/15

★ギャラリーあじさ

追平陽子木版画展 12/11～12/16

★ギャラリーさんちか

二元会展 12/8～12/11

★ブタン王国の印象

主体美術兵庫作家展 12/12～12/16

★ハッセル・ブラード写真展

水彩連盟兵庫支部展 12/22～12/25

★ギャラリー・ド・ラ・ベ

納健ヒマラヤ、ネパールのスケッチ 12/6～12/11

★芦屋ギャラリーニール

フランス版画ミニアチュール展 12/3～12/18

★そごう神戸店美術画廊

迎春用掛軸・初釜用茶道具展 11/30～12/5

★現代丹波運板陶芸展

12/8～12/12

★大丸神戸店美術画廊

傘寿記念 藤原啓展 12/6～12/11

★肉筆浮世絵名品展

12/12～12/18

★三越神戸店美術画廊

明治・大正・昭和有名大日本画展 12/4～12/17

★いきいき絵草紙源氏物語

白い衾に、薄紫のやわらかな衣を重ねた夕顔は、華奢でいたいたしいばかり繊細な美女である(夕顔より)

絵草紙「源氏物語」は田辺聖子の書き下し150枚の文章と新進気鋭の岡田嘉夫がイラストレーターの情熱を



岡田嘉夫さん
注入した
オリジナル
作品90
点による

画期的な豪華本(角川書店定価四八〇〇円)。岡田さん(35歳)は神戸生れ長田高校卒、中西勝彦伯に師事したこともある神戸っ子。現在東京在住だが苦心の絵草

花時計



「株式会社・神戸市」

週刊東洋経済が臨時増刊号で「80年代関西ルネッサンス」という特集を組んでいる。

「関西復権とは何か」そして「10兆円プロジェクト関西新国際空港論」やインタビュ―「21世紀

紙「源氏物語」の完成に故郷神戸で1月17日、22日、神戸大丸で原画展が開かれる。

★神戸で「イカロスの会」

フオークシンガーさだま

さしさんが80新春に公開の映画「翔ベイカロスの翼」

(制作/翼プロダクション)に出演。10月27、28日に「アン・ドゥー・トゥアー」に

於て「イカロスの会」が開かれ約50名のファンが集い

レコードコンサート、製作発表時の特報フィルム上映

平塚ロケ参加者の報告など楽しい時間を過ごした。こ

の映画はキグレサカカスの花形ビエロで惜しくも28歳

の研究学園都市を求めて「実力派経済人」のわ

が関西ビジョン」などで最後にミナト神戸特集が

登場「21世紀の海上文化都市に賭ける」となっている。そして、しめくく

り「ポートピア81」をプロデュースする」という

小林公平(ポートピア81総合プロデューサー)のイ

ンタビュ―記事と出展館の紹介などでまとめられ

ている。

この特集のなかで神戸のポートアイランドプロ

ジェクトが大きくクロー

の若さで世を去った栗原徹

さんの実話をもとにしており、さださんは主役を演じ

ると同時に音楽も担当し「イカロスの会」(3311610)

★レディスサウナの美容体操カレンダー

生田新道のレディスサウナでは、お正月の初風呂に

入りにきた人先着200人にサウナコース500円割

引き券が12枚ついたビュティ・カレンダーをプレゼント。カレンダーの裏に、

きれいにやせられる美容体操の図解がついている。

「今年こそスリと!」と決心をしている女性には是非この機会に。

年始1月2日より営業
お問い合わせ ☎ 32114742

●KOBE POST

★十月二十七日十一月三日まで

津高和一面伯は、西宮の自宅で、

△架空通信・対話のための作品展Vを開催。名塩生瀬島の子紙に

よる造型を試行。今年四月ワシントンVOKADA、SHINODA AND

TUTAKA (Three Pioneers of Abstract Painting in 20th Century)に出席。五月、ニール

クで過労のため入院。六月、兵庫医科大学に直腸周囲腫瘍でまた入院。やつと体調改定しての側展

した。「架空通信講座」や季刊「架空通信」の停刊も病気が原因。どうぞお元気で。

★「食って食って食いまくれ」全国

の美味探求の旅に出て松山善三氏が、光文社から「〇九店ガイド

つき」の食本ある記を出版。ハヤ780V神戸の「麗々」も「明

石の「菊水軒支店」の顔がみえる

★詩人の赤松徳治氏が、詩集「痛

み遠くまで」を第三紀層の会出版

センター(〒670神戸市灘区中原通

七ノ一ノ七赤松方)より発刊。

★神戸松の家(鶴岡栄光)が、東京

京赤坂東急ホテル花くま子店に開

て十周年を迎え、十一月十二日に

「花くま子東京店十周年記念の会」

を開いた。文芸春秋社の「東京い

い店うまい店」でも最高の五つ星

となり、ますます美味求真にいそ

ましている。

★女流版画家で、海星女子学院出身

の太平洋美術会会員、迫平陽子

さん(埼玉県在住)は出身地の神戸

で初の木版画展を開く。12月11

日(火)16日(日)迄。ギャラリ「あじさ」にて。

★十一月二十二日午後六時より相

楽園会館で神戸文化ホールが「展

27121114992

27121114992



たのしい クリスマスの
うれしい プレゼントは
おもちゃの カメヤで



クリスマスのご用意はお早めに
地方発送承ります。(市内無料配達)

おもちゃの



カメヤ

■三宮方面でのお買物は…
さんちか店(ファミリータウン) ☎391-4045
三宮店(センタープラザ) ☎331-4969
■元町方面でのお買物は…
元町店(元町通3丁目山側) ☎331-0090
元町東店(元町1番街不二家前) ☎391-0768
■神戸駅前方面でのお買物は…
サンこうべ店(神戸駅前地下街) ☎351-6002

Hat dog



なんすい
軟水のCoffee
味、また格別。

営業時間 午前10時～翌午前2時



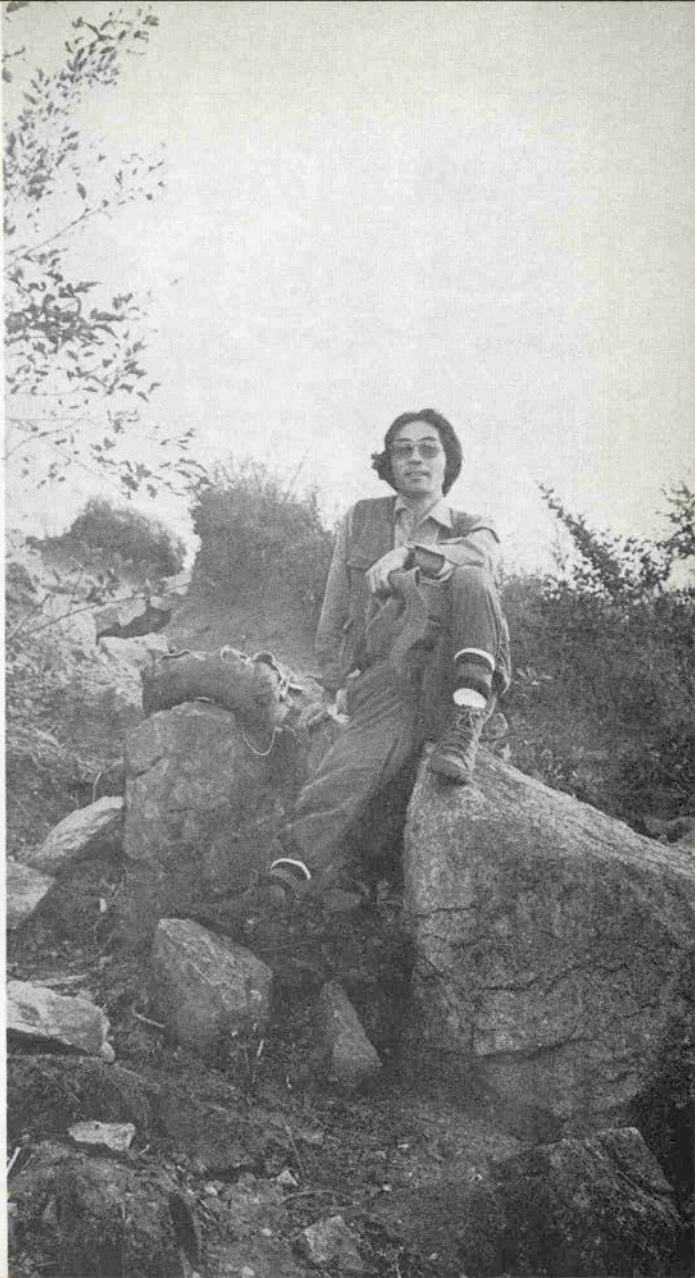
コーヒーハウス

ハットドッグ

バス停<中山手1丁目>南側角
☎ (078)321-1689

ルポルタージュ

極楽茶屋へ至る道にて



●知らない人の神戸／最終回

六甲山全山

蒼 竜 一

カメラ／緒方しげを

縦走コースより：

全山縦走コースを歩いてみて、また新たに神戸の魅力を感じた。このような海と山を持ち、日々の生活の中にそれを組み入れている人々の知恵を想う。

山と言っても峻険な信濃の山々とも違うし、海といっても、日本海の暗い海とも違う。瀬戸内の晴天の多い空

の下で、人情に染めぬかれた明るく優しい海であり、山である。私は縦走コースの山上に度々立ち止り、眼下に広がる街並みや海を見下しながら、いろんなことを思ってみる。この一つに、私の脳裏に浮かんた、眼前の光景とは全く異質な一風景があった。それは、太宰治が、

「津軽」を書くために故郷を訪れ、バスの窓外に北津軽の景色を見て感じたものであった。太宰は書いています。「人の肌の匂いが無いのである。山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係に生きている。」これは、風景の一手手前のものだとやっている。それに比べて、私の目にする、コナラの木もウラジロの木も、紅葉したヤマハゼも、笹の葉一枚に至るまで、総てここにおいては、人間と無関係には有り得ない。人と話し、語りかけ、幾多の人情に染め抜かれた、優しい風景そのものと言える。私は山を歩きながら、これ程幅広い多くの層に親しまれ愛されている山を見たであろうか。下はまだ小学校に上る前の幼児から、上は八十歳近い老人にいたるまで、男も女も、それぞれの仕方て山を歩いているのである。ハイキングの歴史が、古いのであろう。道連れになった老人に聞いてみても、月に最低二度は山に登ると言う。もう何十年も登っているが、年代によって登る山が変化したとも語っていた。一口に何十年と言っても、人生の道はそう平坦なものではない。恋をしていた若い頃もある。子供のことや職場での人間関係に苦しんでいた時もある。戦争で跡絶えた時期もある。連れ合いに別れた哀しみを踏みしめて登った人もいたろう。人生のいろんな思い出の回想を山歩きに求めた人もあったろう。このように六甲山は、人生のその時その時の楽しみや悲しみを受けて、人はまた自分たちの思い出の層が、幾重にもこの山に焼きついているのを見る。山は優しい。風景は余りにも美しく過ぎる。人もまた多くを知り過ぎると、優しさと寂しい心を片隅に抱くものだ。優しく美しい海と山に囲まれた人達の心の内が、私には何となく分るのだ。私は神戸が好きだ。道行く人も、山も海も、見知らぬ人の私を、このように憩わせ、やすらわしてくる。そのような街は、少ない。

六甲山全山縦走五十六キロと聞いた時、私は正直言って二の足を踏んだ。しかし、編集部が学生時代からの女

登山家が居て荷物を持ってくるとか何とか言って、宥めずかされているうちに、なんとなくその気になった。ただし全縦コースを何回かに分けてもという条件で、とにかく塩屋から宝塚まで歩くことになった。第一回目は、「六甲全縦市民の会」のお世話をしておられる、神戸大医学部の村上宏先生以下五名のパーティで、菊水山駅からカンツリー・ハウスまでを歩いた。朝八時、露に濡れる草を踏んでの歩み出しは、なかなか快適なものであった。特に九時頃ついた菊水山山頂からの海の眺めは、思わず息を呑むほどの素晴らしさであった。濃い重油が何ぞの広大な海の上に、数知れぬ紋白蝶が舞いおり、朝日を浴びて静かに羽搏いているような光景であった。その後も、太陽が上るにつれて、樹間に現われ、あるいは稜線から見晴かす海の光景は、ガラスの破片をばらまいたように鋭く、直視するに堪えぬ光芒を放っていた。やがて、気温の上昇につれて、それはガスのかかった朧な鳥瞰とはなったが、それだけに朝の輝く海の光景は、鮮やかに私の脳裏に焼きついている。

菊水山から有馬街道をまたぐ天王吊橋を越え、急な坂道を鍋蓋山に向かって上って行く。逆方向から来るハイカーとすれ違い、また後ろから追い抜いてゆくグループも多くなった。鍋蓋山付近では、道脇にヤマモモが植樹されている。三百本が天王吊橋完成記念として植えられたらしい。その基金は、金山縦走参加者からの献金によったとか。山の小径に木を植える、その行為一つをとってみても、神戸の人達にとつての、これらの山の在り様が、読みとれるようだ。鍋蓋山を過ぎて、空海が入唐前登り帰朝後再度登ったのでその名がついたという再度山には十時半。お昼は市ガ原でとった。この調子では、全山縦走の宝塚到着は翌朝になるとのことである。昼からは少しピッチをあげ、天狗道から摩耶山、アゴニー坂と、かなりしんどい行程であった。村上先生について行くのが精一杯である。私は情けない気持ちになって、よく山に行っていた頃のことを思っていた。あの頃、といっても

ずいぶん昔のことになるが、私は毎晩五キロは暗い山道を走っていた。今思えばずいぶん偏屈な生き方をしたものだ。会社の同僚などとの麻雀や、飲み屋での交際は一切しなかった。三度に一度はつきあうのが常識だろうが、私の場合は十度に一度。そのうちに誰も誘わなくなった。会社の若い女の子なども、「あの人の生活態度の冷めたさは何とも言えないわね」と、聞こえよがしの陰口をきいたりもした。しかし、それも長くは続かなかった。人間など他愛のないものだ。「彼奴はああいいう人間なんだ」という評価が決まってしまう、そこに乗っかって生きて行ける。私は夜道を、ひたすら走った。そして本を読み、休日には山へ行った。私の体はパネのように疲れを知らず、山へ登っても、腰を下ろして休む必要などはなかった。あの孤独な、自分を作って行くような期間がなかったら、私はその後にく異国での無茶な生活に、とても三年余も耐え切れなかったであろうと思う。

二回目はカンツリー・ハウスから宝塚までを歩いた。前回と同様距離にして十七キロ余りである。奈良から出かけて行く関係上、歩き始めるのが昼前ということになる。一時間ほどで六甲最高峰。そこで昼食。ちようどこかの大学山岳部が宝塚の方から砂を詰めた大きなリュックを背負って、はあはあ息を切らして到着した。新入部員などは、顔面蒼白になっている。あれ程違うものかと思う位、上級生には余裕が見られる。全員リュックから砂をあけた。

頂上から見晴かす港も海も、今日はガスを被っている。芒の穂波が美しい。三十年ぶりに日本に帰って来た老人が言っていた。「故郷に帰り裏山に登ってみると、山から見下す稲穂が風にそよいで、海のように見えた。途端に涙が頬を伝って、何も見えんようになった。」老人はアメリカで庭師をしていて、私は彼の訪日の間だけ、彼に代って顧客の面倒を見ていたのだ。それっきりの付き合いだっただが、老人の言葉は不思議に記憶に残っている。

宝塚への道は下り坂が多い。私はこの日運動靴で来た

ことを後悔した。下りでは足の爪先を傷めるのである。案の定、足の小指が疼き始めた。棚越新道を越えて暫くした時であろうか。木暗くなり始めた山中に今年大学のクラブ練習中に死亡したとかいう木の立札があつて、その前に菊の花が供えられているのを見た。私は六甲頂上で山岳部の連中を見てから、彼らの姿と二重写しに思い浮かぶ二人の姿があつた。死んだ者は歳をとらぬというが、やはりNもKも若い学生時代のままなのだ。私は学生時代、大学の月寒寮に居た。Kは信州の男で、いつも汚れた学生服を着ていた為もあったか、みんなは「オンボロ」という渾名で呼んでいた。無類の山男であつた。Nは学部の後輩で、これも無類の山好きで、さっぱりした気性の男であつた。先に卒業した私が、大阪で教員をしていた時に、卒業旅行でやって来て泊っていた。自転車で駅まで送ってやった彼の重さを憶えている。その三か月程後、彼らは冬山に入り、日高で雪崩に遭つて死んだ。NもKも父がなかった。Nは放送局に就職が決まり、母親は背広をつくって待っていたという。みんな四回生だった。社会に出る学生時代最後の山行きだったのである。リーダーのBは、雪の中で二日間生き埋めになつていて、手帳にメモを書き残していた。BはNやK等に詫言した後、両親には、死んでも必ず何かに生まれ代つて、お父さんやお母さんを見守りたいと書き残していた。一昨年北海道に行き、バスで日高を越えた時、バスガールが、その時の遺書を読んだ。「白い荒野」であつたか、歌も作られたらしいが、遺族のあまりの悲しみのために売られることはなかったという。

三回目、余すところは、塩屋から神戸電鉄の菊水山駅までである。私は風邪を引いていて、体調はすこぶる悪い。奈良から行って塩屋で電車をおり、山にとりかかったのは、もう既に正午であつた。平日でもあつたので、山は人がほとんどいなかった。旗振山では、ロープウェイやリフトが定休日で、無人の遊園地を晴天の下に見るのは、また趣深いものがある。展望台から、菊水山で見



六甲山は、人生のその時その時の楽しみや悲しみを受けとめて、人はまた自分たちの思い出の層が、幾重にもこの山に焼きついているのを見る。山は優しい。

たような澄んだ海に再び出会って、私はあくことなく眺めていた。この度、もう一つ眺めたものに、山はぜがある。明るく空に、紅葉した葉を雪の結晶の如くひらいて、ちっちゃな実も、美しい。久しぶりに、一人でよく山に行っていた頃を思い出した。体の調子もよくなって来た。

鉄拐山では、「おらが山毎日登山会署名所」というのがあって、神戸の人達がいかに山を楽しんでいるかが分る。全国に山多しといえど、神戸の人達のような山の楽しみ方をしていく土地は、まだ聞いたことがない。自然と調和し、それを生活の中に組み入れてしまう神戸っ子の知恵と、バイタリティーに私は拍手を送りたい。そういえばこの六甲全縦コースは、すべて神戸っ子の裏庭のようなものである。毎朝、いかに多くの人達が山に上っているか、他所の土地の者には考えられないことなのだ。彼等は出勤前のひと時を、極く気軽な気持で山に登ってくるようだ。

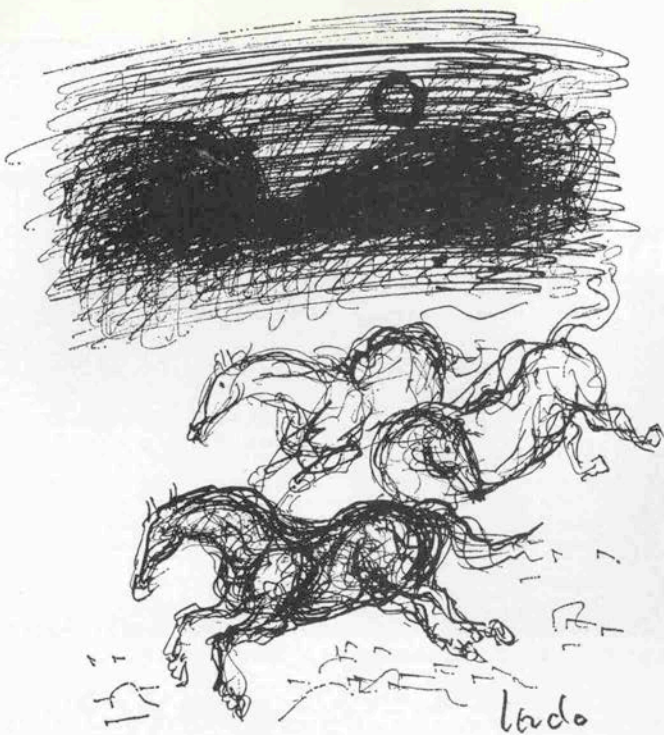
他にも高倉台の、あのお伽の国のように奇妙に澄んだ明るさ、須磨アルプスの岩場、高取山からの眺望、それらも印象に深い、今は紙数も尽きた。

山岸外史は、親友の太宰治に「世の中で一番美しい言葉はさようならである。」と、絶交状を書いたが、遠き別れに「アディオス」と、また会える友に「アスタ・マニャーナ」と区別して使う南米の友のように、私も敢てアスタ・マニャーナと言おう。ではまた、お会いする日まで、お元気で！

（有り難うございました。一応今回をもって「知らない人の神戸」のルポを終わります―蒼）

掌の旅

奥野 忠昭
絵・犬童 徹



トア・ロードと標識の立っている広い道をまっすぐ歩いた。両脇のビルの屋上は夕日に染められ、道路の暗色とは対照的だった。

私はふと幼い時期に過ごした谷間の村を思い出した。

ちようどあの村もこんなふうに両側から高い山に狭まれ、その山頂がいつも夕日に輝いていた。

「きれいいじゃないか」

私が言った。妻は歩みを止め、ちらつと屋上を見上げたが、すぐに単調な歩みへと帰っていった。

疲れているのだろう。ほとんど見知らぬ私の親類の人々に交じって、会話するだけでもたいへんだったに違いない。それにもう余命幾許もない叔父のやつれた姿やそれを取り囲む家族たちの悲しみの中にと陰鬱さがしみ込んできて気持ちをめいらせてしまう。

しかし、そんな気分もすぐに吹き飛ぶだろう。海の広がりや白い波のしぶきを見ると、きっと心も和むに違いない。

それにしてもあの女はいったい誰だろう。確かにどこかで会ったような気がするが、どこでだかまったくわからない。

私はそつと後ろを振り返る。やはり女はこちらに向かつて歩いてくる。

先ほど時間待ちのためちよつと立ち寄った喫茶店にあの女はいた。私がそこに入ったとたん、彼女が眼に入り、はつとした。軀が強ばり、じんとした痺れが軀中を走った。どこかで見たことがある。かなり親しく話したことがある。そう思えた。だが、どこでだったか、誰だったかわからなかった。

彼女の方も私に気づくと驚いて何か言おうとしたが、続いて入ってきた妻を見ると、あわてて下を向き、その後私の方を決して向かなかった。

女の横には数人の女子学生が坐っていて、大きな声でしゃべり合っていた。ほとんどが食べ物の話だった。

女は私の後をつけているのだろうか。それともただ偶然に同じ方向に行くだけなのだろうか。

「港だわ」

妻は大きな声を出した。

「海が見えてる」

大型の船を浮かべた海が空の方まで拡がっていた。私は先ほどビルを眺めたとき谷間の村を思い出したことを恥じた。村は山に囲まれ、決して海など見えなかった。

海岸通りを右に折れた。道の広い割には人通りは少なかった。

「ほんとに船が出るの」

「大丈夫、確かめてあるんだから」

「早く家に帰らないと、お姑さんが気嫌が悪いわよ」

「いいじゃないか、たまに来てもらっているんだから」

「そうはいかないわ、子どもを見てもらっているんだし」

妻の顔は沈んでいた。海を見ているのに家の部屋を覗いているようだった。

「あんなときはいいわね」

「ええ」

「今先ほど、喫茶店で会ったでしょう。陽気にしゃべりあっていた若い人たち」

「ああ」

「うらやましいわ」

私は黙った。顔をしかめた妻の額の皺に狂気じみた熱氣をちらつと読み取った。

「だからさ、新婚旅行でもするつもりで船旅をするんじゃない」

「たった一時間の新婚旅行」

「いい思いつきだろう。自分でも感心しているくらいさ」
本心そう思っていた。妻と二人で何かをするというところが最近なくなっていた。お互、別々のことを考え、別々の仕事をしている。

「見てみる、夕日がきれいだ。アーベント・ロートさ」
妻は見なかった。せかせかと歩みを速めた。

「すぐだと言ったのに、ずいぶんあるじゃない」
「ほんとだ。こんなにあるとは思わなかった」

歩道橋を渡るときもう一度後ろを振りかえった。女は大股に風を切って歩いてきた。髪の毛は黄金色にきらめいて、長くなびいていた。

それを見て、また私は谷間の村のことを考えた。
村には一年に一度祭りがあった。山の頂きにある細長い広場を馬たちが駆け廻った。まわりに人々が群がり、歓声をあげながら馬の尻を竹や鞭でぶった。馬はいななき必死で走った。村の若者は振り落とされまいと馬のたてがみにしがみつき、わきばらに軀を寄せてけんめいに走った。ときには倒れた若者の上を馬が飛びはねていくこともあった。

見物人も若者も子どもたちも馬も、みんな熱狂し、絶叫しあった。

「なにしているの。はやくいらっしやいよ」

妻は歩道橋の途中で、まだ降り始めない私を不服そうに待った。私はあわてて階段を降りた。

ようやく港に着いた。船はあと二十分まで来ることがわかった。待合室には人々がたくさんいたが、彼らはみんな遠い島へ行く人たちだった。私たちのように鉄道が発達し、それに乗ればわずか四、五十分で到着できる街へ船で行くなどという物好はいなかった。船会社だってそんな客をあて込んでいるわけではなく、ただ遠くからの船客にその街へ行きたい人もいるため、少し航路を延ばしたにすぎない。

「ちよつと旅をする気分になるだろう」

「まさか。あなたの子どもじみた遊びにつきあつてあげただけよ」

「そんなふうに言うなよ。君のためだと思つてやつたことなんだから」

「電車なら、もう帰り着くころだわ」

「早く帰つたつて、どうつてことはないじゃないか」

家でも何もしないあなたにはわからないのよと言われそうで、あわててコーラを買に行つて妻に渡した。妻は無表情でそれを飲んだ。あき缶をごみ箱に捨てると、妻は週刊誌を広げた。

私は新聞を読んだ。離婚のもつれから別居中の妻を殺した男の記事が載つていた。子どもの目の前で嫉妬に狂つた夫が隠し持っていたナイフで妻を刺した描写が生々しく、男の情念のすさまじさが目に浮かんだ。

「ばかなやつもいるもんだよ」

私はその記事を指さしながら新聞を妻に渡したが、妻は見出しだけをちらつと見ただけで返してよこした。

「世の中にはいろんな人がいるものよ」

妻は週刊誌に熱中していた。

私は待合室を見廻した。だが、女の姿はなかった。やはり偶然、こちらに向つて歩いてきた見も知らない女に違いない。私の思いすごしだった。

船が着き、たくさんの人たちが降りてきた。だが、乗る人は私たちだけだった。

船室にはまだ多くの人たちが残っていたが、みんな疲れた顔をしていた。

デッキに出ると、若者がテープでロックを鳴らしていた。ぴたりくつついた若い女は男の背をしっかりと握つていた。

若者の横に立ち、白波と明りのつき始めた街々の連なりを眺めた。

激しいリズムが続き、若者とその恋人は足で調子をとリ、軀を上下に揺すつた。私も彼らのまねを少しした。

私の耳に馬を追う村人たちの歓声が聴えつた。それはこの音楽よりももっと激しいものだった。

若者はちらつとこちらを向き、恋人もその後が続いた。お互に顔を見合わせくすつと笑い合つた。

私は彼らから離れ、反対側の海を眺めた。海に夕日が沈むところだった。何倍にも脹れあがつた太陽が波を柿色にしていた。

祭りの夕暮れも美しかった。頬を火照らせた村人たちや馬の背に柔らかな黄色の陽が照り返つていた。

だが私はいつも憂鬱だった。思いっきり熱気を発散させた友人たちの満足げな顔を眺め、何もしないでただぼんやりしていた自分を恥じた。今年こそみんなといつしよに思いっきり鞭を振り回してやろうと勢い込んで広場に登つていくのにいつもだめだった。

友人たちはどんなにして馬の尻をぶつたか、馬が自分にどれほど近づいたか陽気にしゃべり合つた。若者たちも馬のたてがみにぶら下がって走つた怖ろしさを興奮してしゃべりあつた。

馬を奉納しない私たち疎開組は縄の後ろの見物席にしか入れてもらえなかった。だが、ほとんどの友人たちはそれを無視し、村の子どもたちといつしよに興奮していた。

どうして私だけが縄の境を越えられなかったのか。どうして祭りの熱狂に一体となれなかったのか、今でも私

にはわからない。

「私、少し寒くなってきたわ」

妻が私のそばにやってきて、そう言った。

「じゃ、船室へでも行ったら。ぼくはもう少しここに
いるから」

「そう、じゃ先に行ってるわ」

テープが終ったようだった。音楽が聞こえなくなり、
あたりが静まった。だが再び同じ曲がかけられ前と同じ
騒がしさになった。

「こんなところにいらしやったの」

突然後ろから声をかけられ、驚いてふり返るとあの髪
の毛の長い女が優しく笑いながら立っていた。華やいだ
眼、水のような膚、若さの匂い。私は緊張し、心臓が縮
めつけられるような気がした。

「久しぶりね」

私は何も答えなかった。

「お忘れになったの」

「いや、あのう」

私はどきまぎした。

「あなたって、そういうお人なんですよね」

「よく覚えているんだけど、ちょっとその、ど忘れとい
うか……」

「さあ、思い出してください。あのときのことを」

「あのときって」

「ほら、あのときよ」

私は女とホテルへ入ったときのことを思い出した。

女も私も裸になっていた。いよいよ私が女と交わろう
としたとき彼女が叫んだ。

「あなた後悔しないわね」

その言葉が私の力を一気に萎えさせた。女を嫌にな
ったわけではない。劣情が
消えたわけではない。ただ
女を怖れた。女が得体のし
れない不明なものになった
のだ。

だが、この女は彼女では
ない。一度抱いた女を忘れ
るほど私はまだもうろくし
てはいない。

「あなた、私にくちづけし
たのよ。でも、私にしたの
はそれだけ。あなたは約束
したの。こんど会ったら必
ず抱くって」

「人違いじゃないの」

「ごまかすつもり」

今まで優しかった眼が一
気に鋭くなった。

「私、中途半端は嫌いな。



何でも完結させたいの」

そう言えばひよっとするとこの女とそんなことがあったかも知れないと思えてきた。あれ以来多くの女とくちづけはしたが交わったことはなかった。交わることが怖ろしく、いつも躊躇していた。

「思い出せないのなら、それでもいいわ。そんなことがあったって思っただろうだ」

「思ってもいいけれど、実感ができないなあ」

「思ってくださいのね」

女はまた前の優しい眼に帰った。女は私の腕を取り歩き出した。私も彼女に従った。

「特別船室を借りての。ベッドもあるの」

女は髪の毛をかきあげた。それは風のようになびいた。女の甘い匂いが漂よってきた。豊かな乳房が揺れ、上着の上からでもわかった。

女から誘われるなんてことはもう二度と起こらないかもしれない。これが最後の機会かもしれない。

私たちは船縁から折れ曲がり、船の真中に来た。私たちがいたのと反対側の縁を見た。そこに妻の背が見えた。手摺りを把み街の方を眺めていた。横の若い男は何かを指さし、しゃべっていた。妻は頷き、男に何かを言っていた。私はあわてて階段を登った。

「ここよ」

女は扉の所に背をもたせかけ私を待っていた。私は引き込まれるように彼女の胸に軀を寄せ、唇を合わせた。女は私の軀を思いつき抱いた。女の軀は熱かった。心臓の鼓動も吐く息も躍動していた。私はその若々しい強烈さにおののいた。あのホテルの女に感じたのと同じ怖ろしさが噴きあがってきた。足先が震え、軀全体が強ばった。

私は女から離れた。

「やっぱり人違いだ」

私は叫んだ。

「人違いだ。人違いだ」

私は後ろをふりむくと必死に階段を下りた。通路を走

り船室へ降りた。妻はいなかった。私は恐る恐るデッキへ上り、船のまわりを一巡した。だが妻はどこにもいなかった。二度同じことを繰り返したがだめだった。妻とおればあの女も近づいてはこないと思ったのに。私は船室に戻り、畳の上に坐り込んだ。みんなテレビを見ていた。テレビではボクシングの世界タイトルマッチを放映していた。日本選手の活躍にみんな拍手をした。

もうすぐ港に着く旨の放送があった。それでも妻はなかなか帰ってこなかった。乗客たちは荷物の整理を始め、私も荷物を持って通路に出た。妻はむこうから降りてきた。

「あら、帰る準備してくれたの」

私を見ると驚いたような顔をした。

「どこへ行ってた」

私は言った。

「街の灯を見ていたの」

うそを言え、捜したのにいなかったじゃないか、と言いかけたがやめた。それはあまりにも危険な言葉だった。「楽しかったわ。やっぱり、あなた、これいいアイディアだったわよ」

船が港につき、橋がかげられると一番に降りた。そして、船から降りてくる人をひとりひとり見つけた。

「なにしているの。早く行きましょう」

妻が声をかけたが私は動かなかった。船客たちの降り方はスムーズだった。すぐに全員降りてしまった。だが、あの髪の長い女だけは降りて来なかった。

△了▽

奥野 忠昭



「我々の世代は一種の『再生』の世代。どのように生き直せばいいのか、を常に自問していると思います」という、『再生』が奥野さんの今取り組んでいるテーマだ。現在、執筆中の作品も、女房、子供を捨てた男が、その後どう生き直すか、という問題を扱っている。学校を舞台にした作品『その成果が単行本「煙へ」とする男が、学校という仕事場どう生きるかを追求している。第2回袖戸文学賞（昭52）を「縁捨て」で受賞。現在、小学校教員。大阪府柏原市在住。43歳。